

信仰地名―祭神と神社の巻

―日向神話の神々―

平田信芳

鹿兒島は明治維新のリーダーとして徹底した廃仏毀釈を断行した。しかし大半の藩が日和見を決め込み、ひとり芝居同然の結果に終り古代以来の仏教文化を失なった。その代り神社が栄えたかというところでもない。武蔵野学院大学小川原正道助教の研究によると西南戦争で官軍に協力した浄土真宗がその後鹿兒島で栄え、薩軍に協力した神社側は相変わらず不振だったという。

存在につながっている。韓国や中国から靖国問題で毎年のように非難され、国のために戦った死者に哀悼の気持を表わしてはいけないのか、内政干渉だと仏頂面をする日本人が多いが、日本人の気付いていないことが一つある。かつて台湾・朝鮮・満州へと植民地を拡張した日本人が当然のように征服地に建てたのが神社だった。日本人がかしわ手を叩くのなら理解できるが、被征服者・被支配者である現地人にも参拝させていたのである。被支配者だった中国人・朝鮮人(韓国人)が日本敗北の直後、暴動を起こし掠奪・放火の対象としたのが神社だった。それは当然すぎる帰結である。靖国問題の根底にはそのような不信の記憶が根強く残っていると思う。

個票を作って整理しているが、敗者側の歴史のまとめはみじめなもので、氏名もれ・データ不詳(戦死地・歿年月日・年令)など百三十年経過した今日では判らないものが多い。第二次世界大戦の整理を今のうちに実施しないと戦死者を忘却の彼方へと追いやることになる。敗北を知る鹿兒島の歴史家だから気付くことである。

顧られなくなった日向神話の神々を三国名勝図会から拾いあげてみた。解説は次号。

薩摩 大隅 日向 計

瓊々杵尊	10	5	9	24
木花開耶姫	0	4	7	11
彦火々出見尊	6	7	7	30
豊玉姫	6	7	5	18
鵜草葺不合尊	0	7	7	14
玉依姫	9	9	6	24
神武天皇	0	3	3	6
(計)	31	42	44	117

(鹿兒島地名研究会世話役)

信仰地名——祭神と神社の巻

——彦火々出見尊と豊玉姫——

平田信芳

前回、日向神話の神々を三国名勝図会から拾いあげた。薩摩・大隅は変らないが、日向国は島津家の支配下になかった地域の方が広い。洩れていた地域の神社について角川日本地名大辞典45・宮崎県の地名(平凡社)から拾いあげて数値を修正した。

	薩摩	大隅	日向	計
瓊々杵尊	10	5	21	36
木花開耶姫	0	4	12	16
彦火々出見尊	6	7	22	35
豊玉姫	6	7	10	23
鵜草葺不合尊	0	7	15	22
玉依姫	9	9	15	33
神武天皇	0	8	9	17
(計)	31	47	104	182

三国を比較すると日向神話の神々

は圧倒的に日向国に多い。熊本・大分・長崎・佐賀・福岡など九州各県の神社を未検討だが、日向神話の神々は上記の数値から文化人類学的に分析すると、南九州生まれと見てよさそうである。ただ女神の中で玉依姫が多いのは少々不自然である。天智天皇の后や皇女を玉依姫と見て祭神とした結果の水増しだろう。

男神・女神のペアでは彦火々出見尊(山幸)と豊玉姫が最も多い。この二人が交した恋歌の分析から入ろう。わだつみの宮に帰った豊玉姫が妹の玉依姫にことづけた歌

赤玉は緒さへ光れど白玉の

君が装ひし貴くありけり(豊玉姫)
沖つ鳥鴨着く島にわが寐ねし

妹は忘れじよのことごとくに(山幸)

「赤玉は通した緒も光ると云いま

す。質素な白玉を首飾りとした貴方は貴とく見えて、すばらしかったわ」。「沖の方に鴨が飛んで来る島を訪れて、契りを交した貴方のことは此の世が終るまで決して忘れません(一説、契りを交した貴女のことを夜ごと夜ごとに思い出します)」——これらは名だたる国文学者たちの解釈。私は下の句を日本書記一書にある「妹は忘れじ、夜のことごとく」として解釈する。「夜の睦言は二人だけの秘密。二人で言い交した夜ごとの約束も忘れていないよ。逢いたいな」と。

今は採れないが赤玉は串木野の産だった。魏志倭人伝で倭国の使者が貢物として持参するのは真珠と青玉(翡翠)。平安時代の新猿樂記に記された珍品は「阿久夜ノ玉、夜久貝」。これは真珠と夜光貝のこと。どうやら白玉も南の国々・島々の産のようだ。

(鹿児島地名研究会世話役)

山 信仰地名―祭神と神社の巻

― 豊玉姫 ―

平 田 信 芳

日向三代の神々(瓊々杵尊・彦火々

出見尊・鵜草葺不合尊)を合祀する

神社は多いが、パートナーの女神を

共に祀る神社は急に少なくなる。夫

婦神が少ないのは男性優位時代に登

場した現象だろう。それは兎も角と

して、彦火々出見尊(山幸)と豊玉姫

を祭神とする神社を列挙してみる。

A 彦火々出見尊・豊玉姫を祭神とす

る神社

止上神社―国分市重久

鹿兒島神社―垂水市田上

開聞神社―阿久根市山下

高屋神社―内之浦町小串

高屋神社―宮崎市村角

瀬多尾神社―小林市真方

雛守神社―小林市真方

狭野神社―高原町蒲牟田

東霧島神社―高崎町東霧島

華舞神社―都城市山田

祖母嶽神社―高千穂町五ヶ所

青島神社―宮崎市青島

田ノ上八幡神社―日南市飫肥

老神社―人吉市老神

B 豊玉姫を主祭神とする神社

宇治瀬神社―鹿兒島市草牟田町

一之宮神社―鹿兒島市郡元町

豊玉姫神社―知覧町郡

開聞神社姉姫宮―開聞町十町

中宮神社―指宿市岩本

乙姫神社―国分市下井

荒瀬神社―大口市曾木

A 類型の神社はその昔、霧島六所

権現と呼ばれた霧島神の系統を引く

ものと見てよい。霧島神は平安時代

初期に性空上人が霧島山中で修行し

たことから成長した神々である。

B 類型は主として薩摩国一之宮開

聞神社系統の神社である。豊玉姫は

海神(ワタツミノカミ)の娘であり、

南九州土着の航海神に連なる存在だっ

たと考えられる。

彦火々出見尊(山幸)を主祭神とす

る鹿兒島神社系統の神社がA類型に

垂水の下宮神社、B類型に宇治瀬神

社が入っている。どちらも別名鹿兒

島神社である。A類型・B類型にま

たがっていることは、B類型↓A類

型への過渡期の形態であることを物

語る。

海幸の子孫が古代隼人であるとの

記紀の説話と関連づけて考えると、

航海神としての豊玉姫崇拜すなわち

開聞神社を中心とする信仰が最も古

く、続いて山幸(彦火々出見尊)を祀

る鹿兒島神社崇拜、その次に霧島神

崇拜が形成されたと推定出来る。

(鹿兒島地名研究会世話役)

信仰地名―祭神と神社の巻

―海神(わたつみのかみ)―

平田信芳

前回、彦火火出見尊と豊玉姫の夫

婦神を祭神とする神社(A)と豊玉姫を主祭神とする神社(B)に類型化した。B類型には豊玉彦と豊玉姫の父子神を祭神とするものが三社含まれており、これの分析が不十分だった。

宇治瀬神社―豊玉彦・豊玉姫
一之宮神社―海神・豊玉姫
垂水下宮神社―豊玉姫・豊玉彦

宇治瀬神社・垂水下宮神社は別名鹿兒島神社、一之宮神社は郡元神社とも呼ばれ、いずれも由緒の古い神社である、祭神の組合わせを考える

と、豊玉彦を海神(ワタツミノカミ)とする見方、父子神を海神とする見方、豊玉姫を主祭神(海神)とする見方の三つに分けられる。このことから分析してみたい。

魏志倭人伝に見える卑弥呼と男弟

の関係や長崎県対馬の海神(わたつ

み)神社の主祭神が豊玉姫である(広辞苑記載)ことから考えると、豊玉姫(女神)を「わたつみのかみ」とするのが最も古い信仰形態と見てよさそうである。また豊玉姫・玉依姫の名から真珠や貝殻を多く産する地域で名付けられた神の名と理解出来る。

そこで漢和辞典を持ち出し、「豊」という文字の分析に取りかかったが、目をぱちくりせざるを得なかった。「とよ」という常識的な読みが見当らなかつたからである。

漢字には音(呉音と漢音)と訓(古代以来の日本語よみ)があり、漢字で表記される日本の地名は音訓から見て、a系統不明、b和語(古代日本語)、c呉音(五く六世紀の南シナでの読み)、d漢音(奈良、平安時代

に遣唐使たちが持ち帰った北シナの読み)の四類型に分けて発生の歴史を考察出来ると見て作業を進めていたことも幸いした。早速県立図書館に赴いて書棚に並ぶ多くの漢和辞典に目を通した。

「豊」のよみはほとんどの漢和辞典が呉音(フ)、漢音(ホウ)、慣用(ブ)、和語(ゆたか)と記す。名乗(人名用字)として「とよ」とするものが若干ある。最近刊行された旺文社・三省堂・角川書店などの漢和辞典は、「とよ」(㊦語の上につけてほめる意を表す、㊦ほめる意味の接頭語、㊦ゆたかな意を表わす美称などと解説する。㊦・㊦・㊦などは国語・日本語・和語などの略記号であり、ようやく「とよ」が古代以来の日本語と理解出来た。「豊葦原の千五百秋ちいほあきの瑞穂国みずほのくに」とよあきつしま「豊秋津島」に育てられた意味を老齡の域に入つて初めて納得出来た。国語の見直しが必要と知つた。

(鹿兒島地名研究会世話役)

信仰地名―祭神と神社の巻

― 神々の歴史の変遷 ―

平田 信芳

海神(わたつみのかみ)に続いて航海神の時代的変遷を眺める予定でいた。文案を練るうちに日本人が神代の昔から崇拜して来た神々の歴史的変遷を神道の歴史を整理しておくことが先決だと気付いた。鎌倉時代の元寇に際して敵国降伏を祈願し、神風によって元の大軍を二度も撃退することが出来たとして、我国は神に護られた神国との皇国史観に洗脳され、明治以降は皇国・皇軍・神州不滅・神風を信じ切つて世界を相手に戦い、敗戦国への道を辿つた。その歴史を冷静に見つめ直すことが必要だと考えた次第である。

八百万神(やおよろずのかみ)世界三大宗教の仏教・キリスト教・イスラム教はいずれも絶対的存在である神・神の愛にすべてを委ねるが、日本の神道は天変地異・戦乱・疫病な

どから人々を護つてくれるように八百万神に祈る自然神崇拜であった。六世紀以降、中国および朝鮮半島經由で仏教が伝わり、その影響によって神社信仰が形づくられた。

記紀記載の神々 古事記や日本書紀に記された神々を眺めると、天津神(あまつかみ)と国津神(くにつかみ)に分けられていることに気付く。天津神とは高天原(たかまがはら)の神々・高天原から降臨した神々であり、国津神は天孫降臨以前からの土着神になる。

延喜式記載の神社(式内社) 平安時代に入ると、貴族の学問は儒学中心となり、天津神・国津神は漢文的表現の天神・地祇と理解されるようになる。天津神直系の子孫が天皇であり、勅使が差遣される神社が社格の高い式内社になる。総数三、一三

二座。大隅国は五座(鹿児島神社・大穴持神社・韓国宇豆峯神社・宮浦神社・益救神社)、薩摩国は二座(杵聞神社・加紫久利神社)であった。式内社四座が集中する大隅国府(国分府中)周辺の歴史的重みは容易に理解できるだろう。

なお庶民の眼から見たら住吉神・八幡神・春日神・熊野神などは近畿地方から進出して来た外来神であり。庶民の頼りは土着神(産土神)であった。土着神は天変地異・豊かさ・人々の幸福に霊現があると永く信じられた。

寺院との関わり 江戸時代までは神社と寺院は表裏一体で、神社には別当寺があり寺には鎮守神が祀られていた。明治初めの神仏分離令までは仏教の方が勢力大であった。それを倒したのが明治維新と理解してよい。

護国思想と靖国神社 明治から昭和前半までは大陸進出路線での戦争を続け多くの戦死者を出した。護国の英霊を祀るのが靖国神社だった。

(鹿児島地名研究会世話役)

信仰地名―祭神と神社の巻

―住吉神社①―

平田信芳

島津家の始祖、島津忠久は摂津国の住吉稻荷社で狐火に守られて誕生したという。未だ訪れていないが、摂津国一之宮住吉大社の境内に摂社稻荷神社があり、そこに島津忠久生誕地の碑があるという。県内にも稻荷神社と結び付いた神社が隼人町住吉の富隈城跡にある。これを住吉神社と呼んだりするが、「三国名勝図会」を見ると住吉一之宮稻荷神社とある。初めは住吉神社だけだったが、後に一之宮と稻荷神社が合祀され、島津家の保護もあって稻荷神社と呼ばれるようになった。「神社誌」「ふるさとのお社」にもとづいて県内の住吉神社をリストアップしてみた。

- 住吉神社(上甕村小島) 6級社
- 住吉神社(吹上町和田) 南旁神社(合祀)
- 住吉神社(始良町住吉) 6級社
- 稻荷神社(隼人町住吉) 6級社
- 住吉神社(垂水市高城) 手貫神社(合祀)
- 住吉神社(高山町波見) 6級社
- 住吉神社(末吉町二之方) 2級社
- 住吉神社(西之表市住吉) 4級社
- 住吉神社(上屋久町志戸子) 7級社
- 住吉神社(喜界町中間) 4級社

たのだろう。さて、県内に住吉神社が14例あったことを確認出来た。ほとんどが海岸に近く、航海神として崇拜されたものと気付く。例外は末吉町二之方の住吉神社だけだ。内陸部にあり、しかも社格が高い。戦前にあつては大隅半島唯一の県社だった。末吉生まれの七高同級生に「末吉に航海神住吉神社が何故あるのか。これを追求すると日本史の大きな謎が解ける」とハッパを掛けたが、十年ほど前、鬼籍に入ってしまった。弔い合戦のつもりで全国の住吉神社をリストアップしつつある。

イザナギノミコトが「日向の橘の小戸の櫛原」で禊ぎをした時に生まれた底筒男命・中筒男命・表筒男命が住吉三神になるのだが、「三国名勝図会」が詳細に分析した櫛原が本当に末吉にあつたのか。That's the question!

(鹿児島地名研究会世話役)

信仰地名―祭神と神社の巻

―住吉神社②―

平田信芳

大阪市住吉区住吉にある住吉大社は全国に展開する住吉神社の総本社であり、昔は摂津国一之宮であった。住吉の地は大和川下流の右岸にあり、左岸に近世以来の自由都市、堺の町がある。堺は本来摂津国・河内国・和泉国が境を接する処であり、律令制諸国の役人たちの監視の目が届きにくい地域で庶民の自由が育まれる素地があったと見てよい。大和川について地誌的説明を加えると、上流の奈良盆地を南流する佐保川と飛鳥盆地を北流する飛鳥川が法隆寺のある班鳩の里で合流し、地域的に竜田川と呼ばれて生駒山地と金剛山地との地峡を流れ下って河内平野に出る。金剛山地西側の山麓に聖徳太子の眠る磯長陵があり、次いで羽曳野市で応神陵を眺め、堺市に入って仁徳陵

を見ることになる。これらの陵墓は

すべて大和川下流左岸に展開する。

上記のことで大和川の流域が古代日本の中枢だったと容易に理解出来る。

視点を變えて住吉近辺の描写を万葉集から拾いあげてみる。

①いざ子どもはやく日本へ大伴の御津の浜松待ち恋ひぬらむ

(山上憶良、万葉集六三)

②難波に下り住吉の三津に船乗り直渡り、日の入る国に遣はさる

(万葉集四二四五)

③芦の散る難波の御津に大船に

(万葉集四三三二)

④住吉の我が皇神に幣奉り、祈り申して難波津の船を浮け居

(万葉集四四〇八)

これらの歌から住吉の三津大伴の御津難波の御津難波津と考え

られる。大和川河口近くにあった津・湊であり、実体は同じであったと見られる。これらの津・湊は古代大和の外港で、遣唐船の出航地でもあった。

「昔天皇みずから大伴・物部の強物どもを率い」と憶え込まされた文句から考える。と、大和川河口一帯の海岸が大伴氏の拠点であり、大伴氏は古代日本水軍の総帥、住吉神社は航海神であると同時に大伴氏の氏神だったと理解出来る。

ところで大伴金村による任那四島の割譲が任那日本府の滅亡(五六二年)に連なつた。任那日本府の存在を韓国の歴史家は否定するが、金村の息子大伴佐手彦と松浦佐用姫の恋物語まで否定出来るのだろうか。

海原の沖行く船を帰れとか

領令振らしけむ松浦佐用比売

(大伴旅人、万葉集八七四)

(鹿児島地名研究会世話役)